

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

<火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）が継続>

本日（14日）、鹿児島県の協力により京都大学防災研究所と合同で実施した上空からの観測では、新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。火口内では地熱域を確認しました。また2016年5月の観測と比較して火口底の一部が深くなっていることを確認しました。

8月5日から、新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いており、火山活動が高まっています。

2019年10月以降の火山活動は、2018年から2019年の火山活動と同程度以上で推移しており、2014年から2015年に匹敵する火山活動に発展する可能性も考えられます。今後の火山情報に注意してください。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が増加していることから、流下する火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1、図2、図5-①）

本日（14日）、鹿児島県の協力により京都大学防災研究所と合同で実施した上空からの観測では、前回の観測（5月20日）と比較して、新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。新岳火口では白色の噴煙および青白色のガスを確認しました。古岳火口付近では、引き続き弱い噴気を確認しました。

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近に、山麓からの観測においても確認されている地熱域を確認しました。地熱域の温度と分布に特段の変化はみられませんでした。

今回は噴煙の影響が少なく、新岳火口内の観測が可能でした。その結果、新岳火口内での地熱域を確認できました。また、2016年5月の観測と比較して火口底の一部が深くなったことを確認

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。

しました。

・地震や微動の発生状況（図3、図4、図5-③④⑤⑥）

8月5日から、新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いています。14日は、18時までには6回と減少傾向ながらやや多い状態で経過しています。

・火山ガスの状況（図5-②）

13日に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり300トン（12日300トン）とやや多い状態が続いています。



図1 口永良部島 撮影位置図（2020年8月14日、5月20日、2016年5月31日 上空からの観測）



図2-1 口永良部島 島内の状況
新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。

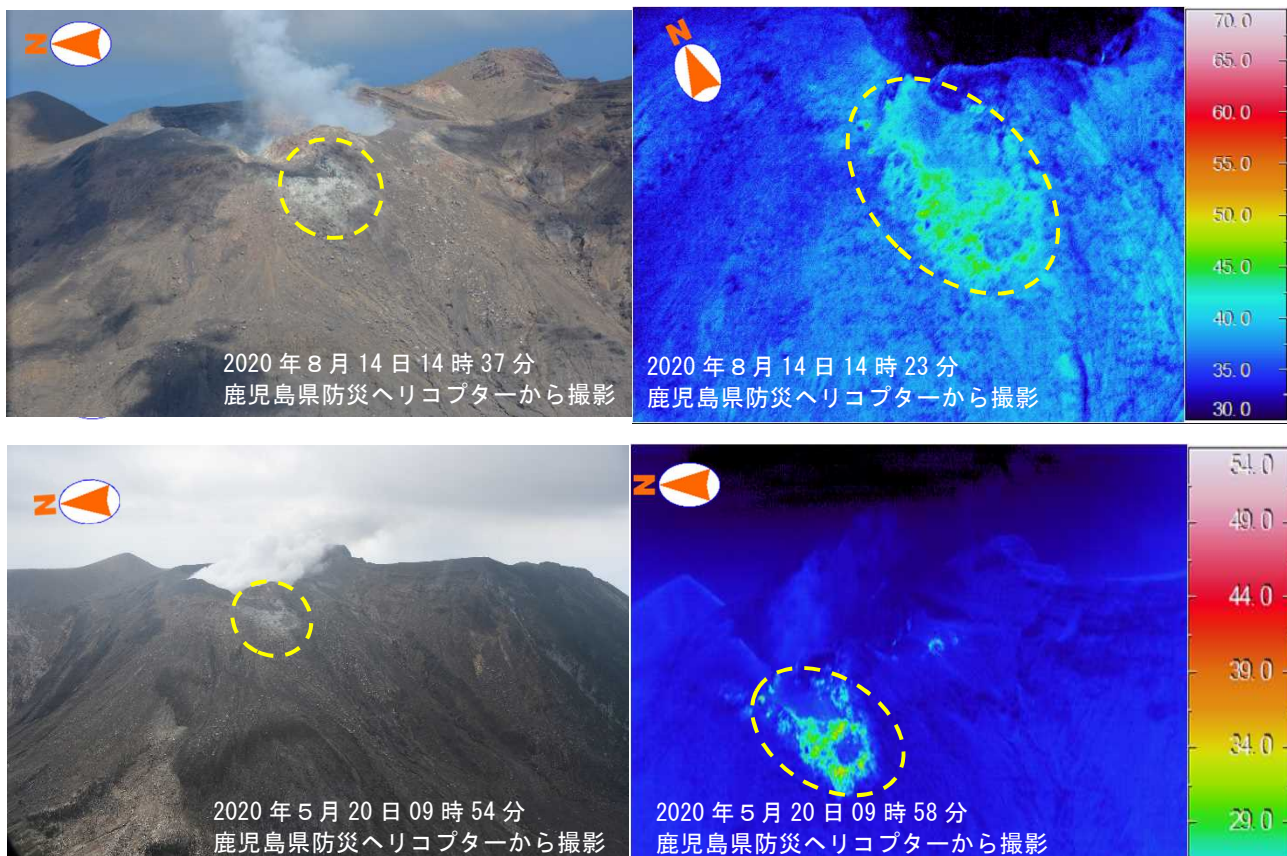


図2-2 口永良部島 新岳火口及び西側斜面の状況
新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（黄破線内）を確認しました。地熱域の温度と分布に特段の変化は認められませんでした。

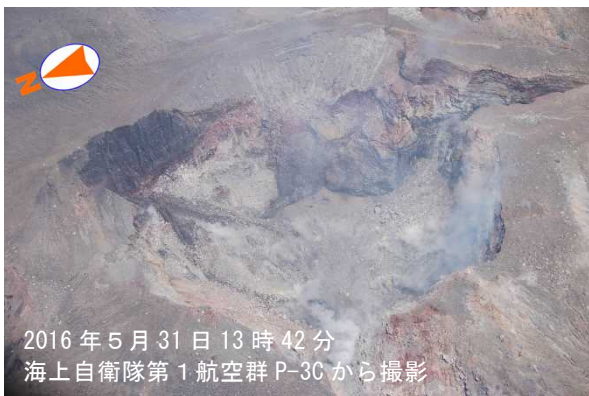
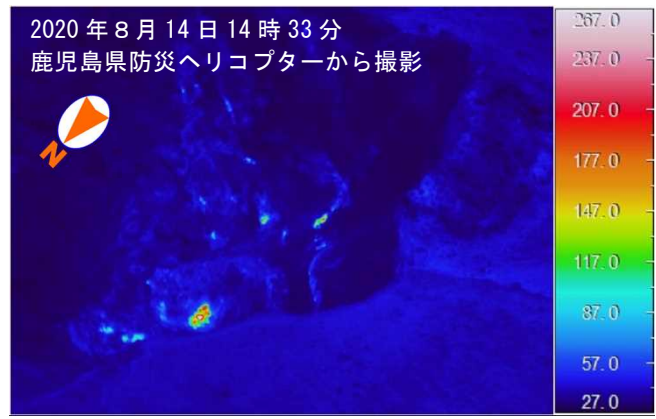


図2-3 口永良部島 新岳火口内の状況

- ・新岳火口では、2016年5月の観測と比較して火口底の一部（赤破線内）が深くなっていることを確認しました。
- ・新岳火口内では、地熱域を確認しました。



図2-4 口永良部島 古岳火口の状況

古岳火口内で引き続き弱い噴気を確認しました。これまでの観測と比較して特段の変化は認められませんでした。

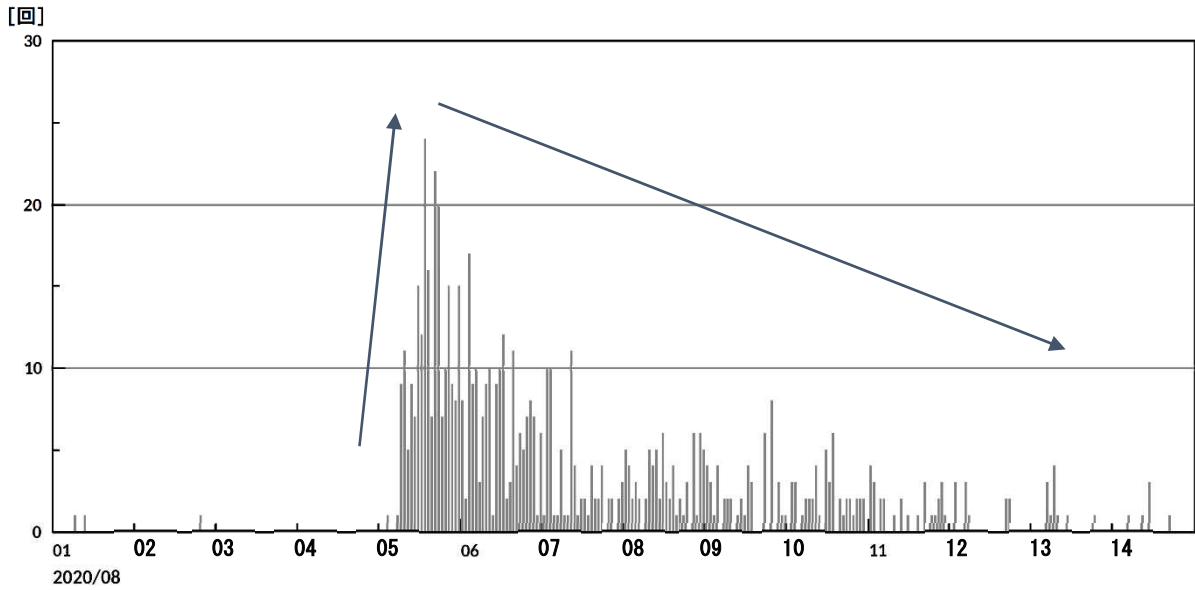


図3 口永良部島 新岳火口付近の火山性地震の時間別地震回数（2020年8月1日～8月14日18時現在）
・8月5日から、新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いています。
・14日は、18時までには6回と減少傾向ながらやや多い状態で経過しています。

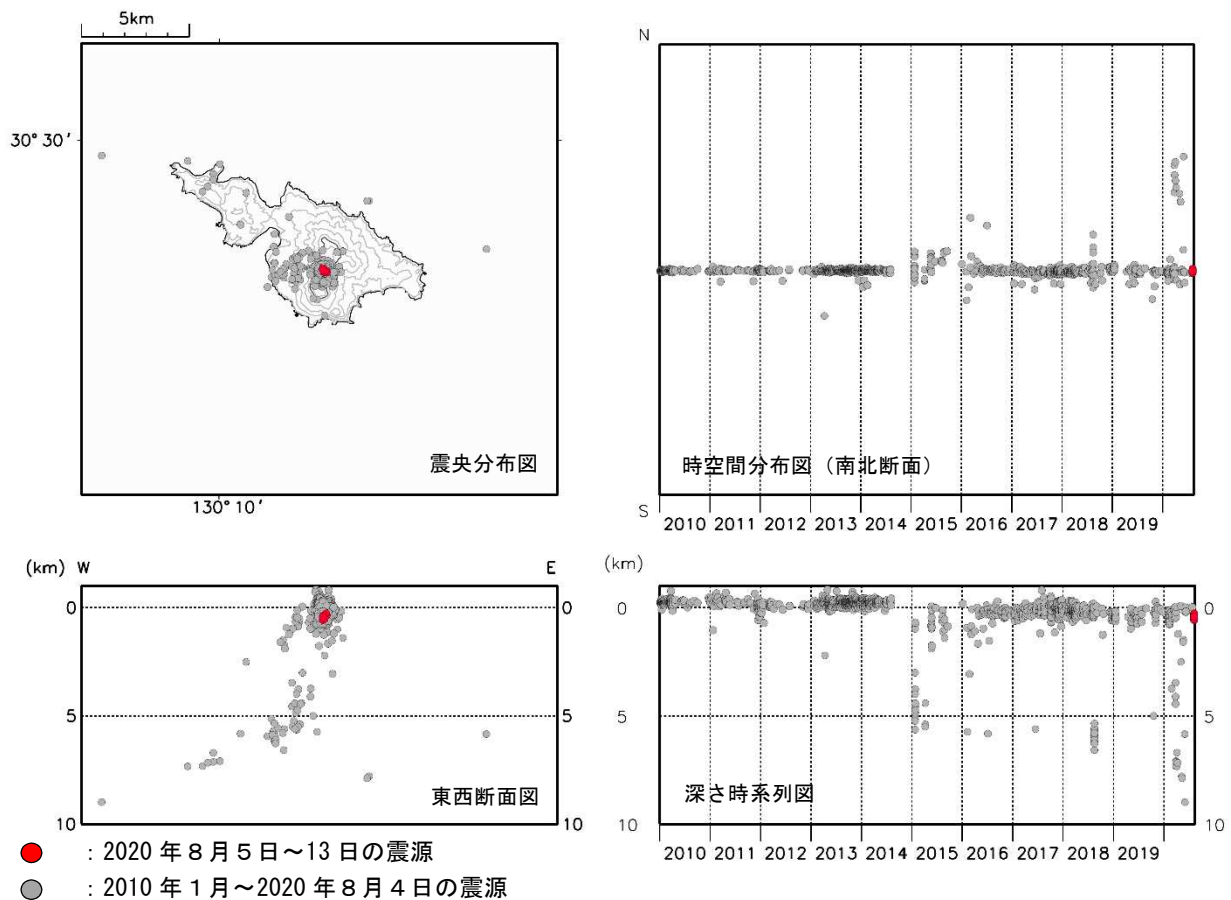


図4 口永良部島 震源分布図（2010年1月～2020年8月13日）

8月5日以降で震源が求まった火山性地震は、新岳火口付近の深さ0km付近でした。

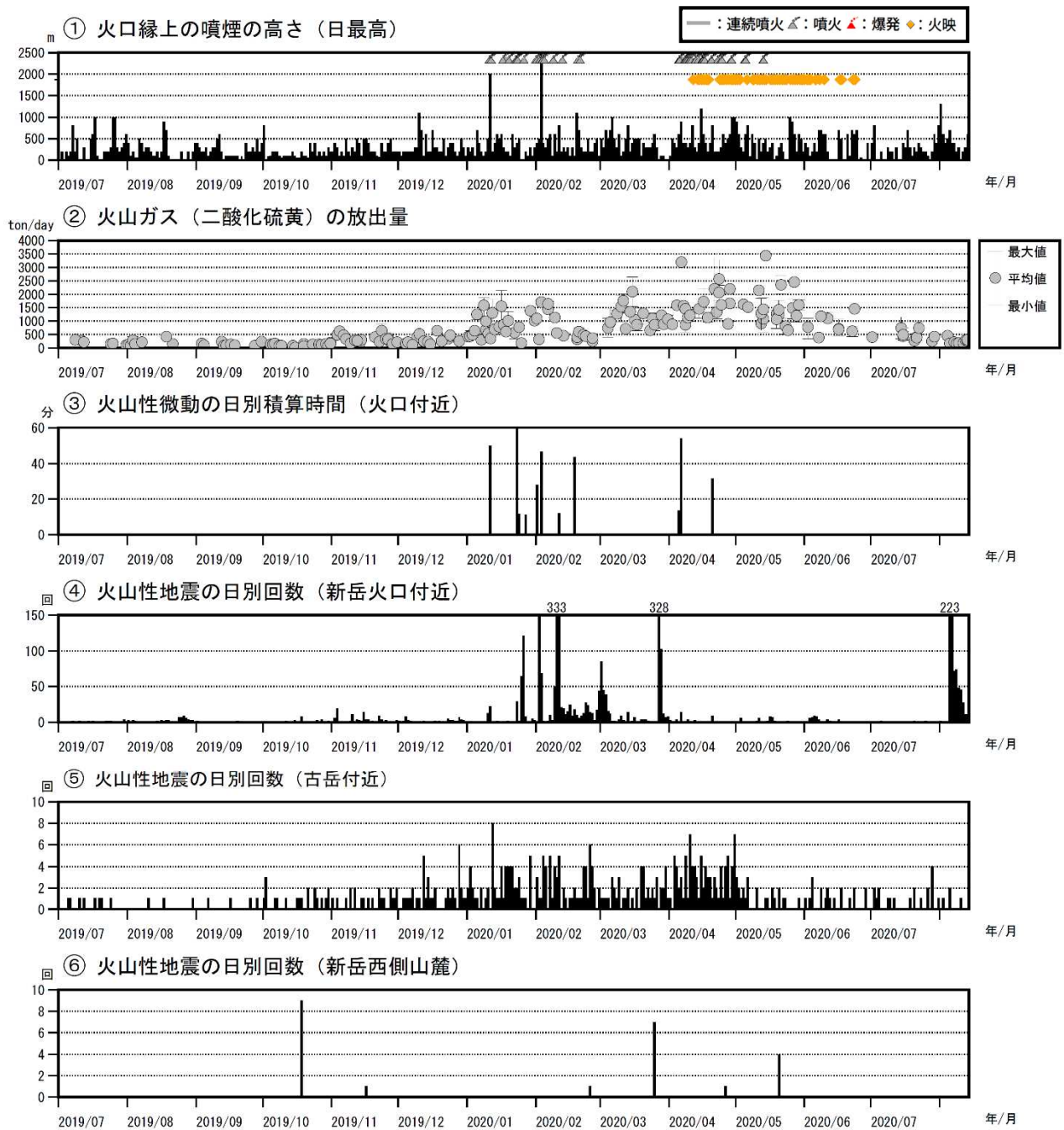


図5 口永良部島 活動経過図（2019年7月～2020年8月13日）

- ・13日に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり300トン（12日300トン）とやや多い状態が続いています。
- ・8月5日から、新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いています。